

石光寺の「染の井」



寺名は、天智天皇の時代、毎夜光る石に弥勒三尊像を彫り、本尊としたことから。平成3年の発掘調査で石像が出土した。中将姫が蓮糸を染めたという井戸「染の井」と、それを掛けたとされる「糸掛け桜」（今は枯株のみ）がある。

中将姫の物語

ちゅうじょうひめ



平成の中将姫 蓮花ちゃん (葛城市マスコットキャラクター)



中将姫

葛城市の二上山麓にある當麻寺。寺伝では、用明天皇の皇子で、聖徳太子の弟の麻呂子親王が河内に建立した寺を、天武一〇年（六八一）、孫の當麻国見が現在地に移したという。本堂に祀られた「當麻曼荼羅」は、浄土信仰が盛んとなった平安時代から信仰を集めた。その曼荼羅を織ったとされるのが、中将姫。姫の深い信仰心と哀しい生涯は、長く語り継がれてきた。平城京に都があった時代、右大臣藤原豊成に中将姫という美しい娘が

當麻寺練供養（お練り）



中将姫の伝承を再現する一種の野外劇。毎年5月14日に行われる。二十五菩薩らが姫の化身の小像を蓮台に乗せ、長い来迎橋を渡って姫を極楽浄土へと導く。當麻寺本堂では中将姫ゆかりの宝物が特別開帳される。（5/13、5/15）

いた。姫は三歳の時、母を病気で亡くした。七歳の頃から亡き母のいるところへ行きたいと願い、毎日「称讃浄土経」を誦読していた。そんな姫を不憫に思った父は新しい妻を迎えた。継母は、ますます美しく成長する姫を憎み、ついには姫を亡き者にしようと企てた。継母の讒言を信じた父は、家来の男に、姫を雲雀山で殺すよう命じた。だが、いざその時になるや、男は逆に姫を助け、山深くにかくまった。後日、父豊成がその山に猟りに訪れた。二人は再会し、父は姫を都に連れ戻した。だが、姫は十六歳の時、世の無常を悟り、當麻寺で出家。現身の阿弥陀如来を拜したいと願った。ある日、尼僧が現れ、「蓮の茎を百駄集めなさい」と教える。一駄は

物語の場所を訪れよう

「當麻寺」へは近鉄當麻寺駅から西へ約1km

「石光寺」へは近鉄二上神社駅南口から南へ約1km



◎當麻寺 ☎葛城市當麻1263 ☎0745・48・2008  
◎石光寺 ☎葛城市染野387 ☎0745・48・2031

一頭の馬に乗せる荷の量。姫は早速それを調達した。姫は尼僧や織女の助けを借り、蓮から蓮糸をとり、近くにある石光寺でその糸を五色に染め、曼荼羅を一夜にして織り上げた。それが極楽浄土の様を表した「當麻曼荼羅」である。実は、姫を助けた尼僧が阿弥陀如来、織女が観音菩薩の化身であった。やがて、姫は、その阿弥陀如来に迎えられ、二十九歳で願い通り極楽浄土に往生を遂げた。當麻寺の西に見える、ひととき美しい山容の二上山。その山の向こうに西方浄土があると信じられてきた。今も、夕日が西に沈み稜線が茜色に染まる頃は、まさに極楽浄土を思わせる神々しさに包まれる。

\*「曼陀羅」と表記することもある。